厳しかった冬の寒さが和らぎ、校内の木々もその蕾を膨らませ、新たな生命を生み出す春の躍動が随所に感じられますこのよき日、県総合博物館副館長、籾木郁朗（もみき いくろう）様を始めとする多数の御来賓、保護者の皆様の御臨席を賜り、第七十一回卒業式が盛大に挙行できますことに、心より感謝申し上げます。

第七十一期生の皆さん、卒業おめでとう。そして、深い愛情で卒業生を支えて来られた保護者の皆様、御卒業、おめでとうございます。

卒業生の皆さんは、今年、創立百二十周年を迎えた伝統あるこの延岡高校で、仲間と支え合い、高め合い、充実した高校生活を送ってこられました。その内容の濃い三年間に対して、校長として心からの敬意を表します。

私にとっても母校である本校は更なる進化を遂げています。その一つが、生徒と教職員との強い信頼関係です。卒業生の皆さんは、入学以来関わってこられた先生方の熱心な指導の下、伸び伸びとその力を発揮してきました。それは本校の校訓の一つ、「自治」の精神によく表れています。

自治とは何でしょうか。私なりに答えるとすれば、それは「周囲と協議を重ねながら自分のなすべき事を見つけ、自らの意志で行うこと」であります。皆さんは、延高三年間の学校行事や日々の授業の中で、その力を磨いてきました。

その場の一つが萌樹祭であり、特に、三年生によるクラス演劇はその真骨頂であります。演劇とは人間の持つ表現の力の集大成です。言葉、表情、動き、衣装、舞台装置、音楽などが一体となって一つのテーマを掘り下げ、聴衆にメッセージを訴えます。その準備では、テーマを決め、台本をつくり、台詞を磨き、動きを合わせます。その一つ一つが皆さんの自治の力を育てています。なぜなら、周囲と協議しながら自分のなすべきことを知り、行って始めて、演劇は形となるからです。

高校卒業という節目に当たり、卒業生の皆さんに私からのメッセージを贈ります。それは、「旅に出でよ」というものです。ここで言う旅には二通りの意味があります。一つは、文字通り物理的移動の旅、そしてもう一つは、精神的な飛躍という意味の旅です。その両方に共通するのは、自己の価値観を揺すぶられる体験です。

私たちは成長し続けなければなりません。成長は、自分がこれまで当たり前だと思っていたことを疑うところから始まります。そして、それは体験の中で生じるものです。ですから、皆さんはこれまで体験したことのない未知の世界へ勇気を持って足を踏み入れる必要があるのです。それが旅に出るということです。

旅に自ら出かけてください。そして異なる価値観や考え方をもった多くの人と出会ってください。その中で、自らを省みて新しい自分を形作ってほしいと思います。それは人生という旅であり、それこそが生きるということに他なりません。

旅に出る、それは身体的に新しい環境に身を置くことだけを意味するのではありません。精神的に未知の環境に身を置くこともまた旅に出ることです。その方法の重要な一つが読書

です。

読書は、言わば著者の人格と向き合う行為です。異なる価値観を持つ人間による渾身の表現を味わい、自らのそれと重ね合わせその振り幅を感じること、それが読書という旅です。読書によって我々は、それ以外の方法では到達し得ない場所へ行くことができます。言い換えれば、読書によってのみ身につけられる力があるということです。

そもそも人間の脳には、文字認識を担う領域は存在しませんでした。人類の進化の過程で文字が使用されているのは、その五百万年の中の、わずかに六千年程度に過ぎません。脳の進化の中で文字認識を担う領域は、つい最近生まれたものなのです。このことが意味することは、文字による理解力は、意識的に向上させる必要があるということです。ここに読書の意義が存在します。

「旅に出でよ」繰り返しますが、自己の価値観を揺さぶられる体験に恐れず挑戦してください。皆さんには、この三年間で身につけてきた自治の力があります。皆さんの母校はその力を身につけさせようとしてここに存在してきたと言っても過言ではありません。延高の卒業生として、胸を張って、新元号を迎えるこの世界で、自らの力を思う存分発揮してください。

卒業生の皆さんが、新しい時代に生きる人として、社会のために貢献できることを期待しています。そして、周囲の人たちと協力し合いながら、明るく幸福な人生を送ることを心から願っています。

最後に、本日御臨席の皆様の御多幸を御祈念申し上げますとともに、卒業生並びに在校生、そしてこの伝統ある延岡高校に対して、引き続き温かい御支援をお願い申し上げ、式辞といたします。

平成三十一年　三月一日
宮崎県立延岡高等学校　　校長　宮野原　章史